

平成二十四年度

中学一般入試① 考查問題 (国語)

注意書き

- ・ 考查監督かんとくの合図があるまで問題用紙を開いてはいけません。
- ・ 解答用紙二枚のみ集めます。問題冊子は持ち帰ってかまいません。
- ・ この冊子には問題が一ページから十六ページまであります。万一、足りない部分があったり印刷が見にくい場合は、手を挙げて考查監督に知らせること。
- ・ 解答はすべて解答用紙の枠わくの中に記入し、用紙には、関係のない文字・記号類は書いてはいけません。
- ・ 字数指定のある問いは、句読点なども字数にふくめること。
- ・ 解答用紙を集め終わっても、考查監督の指示があるまで席を立たないこと。

「次の文章を読み、後の問いに答えなさい。」

中学生である十四歳の「僕」は、コペルというあだ名で呼ばれている。「僕」の友だちの優人のあだ名はユージン。彼は小学校六年生のある日から、まったく学校に来なくなった。彼は中学校に入っても一度も登校していないので、「僕」が彼に会うのはひさしぶりだった。

杉原先生のことを考えると、いつもバックには太陽が明るく照りつけている、ってイメージが浮かぶ。若くて元気がよくて、いつもソウイ工夫とやる気にあふれていた、青春学園ドラマの主人公になりそうな先生だった。ちやうど学校が郊外にあったから、僕たちは大風を作って上げたり、近くの川で水車を作ったりしたものだ。そういうことを企画し、先頭に立つて指導していたのはいつも杉原先生だった。熱血漢であるあまり、我が道を突っ走るくらいはあったけれど、意地の悪いところなんかはなかった。それは誓ってもいい。

そんな杉原先生が、いったいユージンに対して何をしたというのか。

「……小さい頃、ニワトリを飼ってたんだ」

ユージンはそう呟いた。その瞬間、僕は、あつと思った。

そのニワトリのことなら、僕も知っている。ユージンがヒヨコのころから飼っていた、コッコちゃんだ。正確に言うと、ヒヨコになる前から飼っていた。有精卵で買ってきたのを、誰かから、それを温めたらヒヨコが生まれるって聞いて、電球やら湯たんぽやらときには自分の下着の間に入れてたりして、ユージンは苦心惨憺して温め、本当に孵ったヒヨコだったんだ。

「……僕も覚えてるよ」

今までどこかで、見ないようにしていたもの、とりあえずカッコに括弧つけて横に置いていたもの、その場所を今まさにユージンが指し示した気がした。

「杉原は僕のこと、嫌いだったんだよ、ほんとは」

え？ と僕は過去のいろんな場面を思い出そうとしたけれど、思い当ることはなかった。……コッコちゃんのこと以外は。

「気のせいじゃないのか」

ユージンは激しく首を振った。

「気のせいじゃない。僕みたいにいちいちうじうじ考え込むタイプは、生理的に受け付けないんだ、あいつは」

「でも、それを言うなら、僕だって」

いちいち考え込むタイプ、というなら人後に落ちるものではない、と自負している。

「コペルはまだ、可愛げみたいなのがあるんだよ。皆に、愛すべきやつ、って思われるような」  
なんだよ、それ。僕はむっとした。

「意識して媚びてたつもりなんかないけど」

「媚びるとか媚びないとかの問題じゃないんだよ。生まれついでのものなんだ」

そんなふうに言われたら、反論のしようがないじゃないか。

「だからきつと、軍隊に入ったとしてもうまく生き抜いていけるよ」

ここでもう、ちよつと相当カチンときたけど、ユージンが次に、

「でも僕は無理だな」

って言ったとき、ああ、そうだ、ユージンには絶対無理だ、と素直に思えた。それと較べれば、自分の方がまだ、そんなとこでも適応力がありそうな気がした。なんて言うんだろう、ある種の鈍さか。こういうの、健康的って言うんだろうか。いや、違う。でもこれについては後日また改めて考えることにしよう。

「……おやじとおふくろの離婚がいよいよ決定的になったとき、最初おふくろは僕と妹を連れて出ていくつもりだったんだ。持っていくものを、置いていくものを、考えているうちに、ニワトリをどうしよう、ってことになった。あんな、うるさく関をつくるオンドリなんか、町中のマンションには連れていけない。そうだ、学校で飼ってる動物の仲間にしてもらえたらと思いついた。僕もそれなら毎日会えるし、いいか、と思った。それでおふくろが学校へ連絡した。校長は二つ返事でオーケーした。おふくろは僕に、ニワトリを学校へ持って行かせた」

そのときのことも覚えている。

ユージンは、コッコちゃんの歩調(?)に合わせるため、その朝、ずいぶん早く家を出たらしい。学校の正門の前で会ったとき、ユージンは、コッコちゃんの首に、ロープの端をわっかに結わえてかけ、もう一方の端を、犬の散歩のように持っていた(わっかは食い込まないように工夫されていた)。ニワトリを思うように歩かすのって、大変だって分かったよ、って、ユージンは朝からげっそり疲れた顔で言ったものだ。コッコちゃんは、目的地向かって歩いて歩くと経験があまりなかったから、ユージンの家の敷地の外へ出たときも、単に広い餌場に出た、くらいの認識しか持っていなかった。ロープを引っ張ったって、それがこっちへ来いってというサインだとも分かっていなかった。いや、分かっている無視しようとしたのかもしれないけど。とにかくあつちを突つきこつちを引っ張り、探索したがるのをなだめすかし、あるときは抱えて(小学五年生くらいにはけっこう大変な労働だったと思う)、ようやく学校まで着いたんだ。どうするの、コッコちゃん、って訊いたら、学校で飼ってもらうことになったんだ、ってユージンは答えた。でも、授業開始前の、朝のあいさつの時間、杉原先生が言ったことはそれとは違っていた。

これは、ユージンが、自分自身の記憶から再構成して語った、「そのとき何が起こったか」だ。

「ニワトリを玄関の横につないで、職員室に行ったら、杉原がいたんで、コッコを連れてきました、って言ったんだ。え?と最初はわけが分かんない様子だったけど、僕が、学校で……と言いかけたら、ああ、分かった、君が飼ってたニワトリを学校がもらうことになったんだな、と、頷いた。考えればその言い方が、すでに少しずれていた。でも間違いないから、そうです、って返事すると、じゃあ、アズかっつくから、君、教室に入ってなさい、って言われた。その通りにした。そうしたら、朝の職員会議が終わって、教室に入ってきた杉原は、いきなり、『今日の総合学習では、食べ物はどこから来るかということをお勉強したいと思う。たとえばトリ肉は、最初からパックに入っているわけではなくて……』って言い出した。いやな予感がした。『今、そこにある命が、自分の命を支えてくれる、自分の血や肉になるという体験してもらいたいと思う。昔、家で飼っているニワトリをつぶして食べるっていうことは、ごく普通のことだった。だからこそ、食べ物にも自然と感謝の気持ちが湧いたんだ。先生は以前から君たちにもそういう体験してもらいたいと思ってたんだ。命が繋がっていく、ということ。ちょうど今日、優人が自宅で飼えなくなったニワトリを持ってきてくれた。もし、優人が許してくれたらだけれど、つぶして、料理する、ってことをやってみないか』。血の気が引くって、ああいうときのことを言うんだ

ろくな。杉原は自分の『斬新で本質をついた教育』に興奮して目がきらきらしていた。みんなも、ええーって言いながら、退屈な授業が、なんかとてつもなく刺激的なものに変わり、ふだんはタブーそのものの、『殺し』の場に居合わせられるっていう、非日常的な事態に動揺し、それを、僕ははつきりと断言するけど、『興奮して楽しんでた』。コペル、おまえもそうだったはず。いや。責めてるんじゃないよ。そのことを認めてほしいとは思ってるけど。

とにかく、僕は、みんなのためにニワトリを教材として提出すべきだと期待されていた。クラス中の無言の圧力を感じた。僕は、教材にするためにニワトリを飼っていたんじゃない。

その一言が、どうしても言えなかった。僕がずっと黙っているの、杉原は苛々した。『さっき、優人のお母さんに連絡したら、そういうことならニワトリも本望でしょうって言うてらしたぞ』杉原のその一言がクラスのムードに追い打ちをかけた。僕は、それで、僕は、とうとう最後に頷いたんだ。自分の気持ちとは関係なく、体がそう動いたんだ。自分でないみたいだった」

そうだ、僕も覚えている。え? え? って驚いているうちに、ことはどんどん進んでいった。いやだ、やめてほしい、と泣き出す女の子もいたっけ。でも、ユージンはただ黙っていた。いいの、いいの、いいの、と僕は半信半疑でそこにいた。異をトナえようにも、杉原先生の言いつけは、いかにも理にかなっているような気がした。ただ、どこか、何かを無視したような強引さで進んでいく気がしたけど、どこがおかしい、というのを指摘するだけの力が、僕にはなかった。「何かがおかしい」って、「違和感」を覚える力、「引っ掛かり」に意識のスポットライトを当てる力が、なかったんだ。「正論風」にとうとうと述べられると、途中で判断能力が麻痺してしまう癖もあった。

けれど、ユージンが自分なりの判断でそうするというのなら、それはそれでいい自己犠牲のように思えたし、また、ああいうことって、「本当に大切な、知っておかなければならないこと」のような気もしたのも事実だ。「命が繋がっていくこと」なんて言われると。

ユージンはそれからコッコちゃんの首を切ったり、吊るして血を抜いたり、解体したりっていう作業に、積極的とまでは

言わないけど、冷静にタイシヨ<sup>④</sup>しているように見えたから、よく分からないながら、そんなものなのかな、と黙ってしまつたんだ。僕自身、よく知つてたコッコちゃんそんな目に会うのを見るのは、本当はつらかつたけど、飼い主のユージンが我慢<sup>がまん</sup>してゐるんだから、つて自分に言い聞かせた。これは、何か、大事なことに繋がっているはずなんだから、と。

ああ、なんて馬鹿<sup>ばか</sup>だつたんだらう。

<sup>6</sup> ちよつと考えれば分かることじゃないか。

コッコちゃんをブラキ氏<sup>⑤</sup>だと思えば。

「ユージン」

かけた声がかすれてしまった。

「今、僕は、全然気づかなかつた、ごめん、つて言おうとしたんだ。でも」

僕は、ちよつと躊躇<sup>⑥</sup>した。とんでもないことに気づいたんだ。こんなこと、口にしていいんだらうか。

<sup>⑤</sup> 周りのケシキが、すっかり色を失つた。自分の心臓が血液を体中に送り出している、その鼓動<sup>こどう</sup>が、内耳<sup>ないじ</sup>にまで達してじんと響<sup>ひび</sup>いている。

いや。

言わなくちゃ。

僕は大きく息を吸つて、吐<sup>は</sup>いた。

「僕はあるときずっと、声がかけれなかつたんだ、君に。ということは僕はやっぱり、気づいてたんだ。分かつてたんだ、君の気持ち」

自分の声が自分でないようだった。それ以上続けられなくて、しゃがみ込み、片手<sup>ひたひ</sup>で額<sup>お</sup>を押さえた。

僕は心の中で続けた。

……そして、あそこにいた人間の中で、君がどんなにコッコちゃんを可愛がつていたか、僕ほどよく知っていた者はいない。

僕は、裏切り者以外の何者でもないじゃないか。

そうだ。

僕は軍隊でも生きていけるだらう。それは、「鈍<sup>だま</sup>い」からでも「健康的」だからでもない。自分の意識すら誤魔化<sup>ごまか</sup>すほど、ずる賢<sup>がしこ</sup>いからだ。

これが、僕が長い間「カッコに括<sup>くく</sup>つていたもの」の正体だつたのだらうか。

しばらく辺りはしんとしていた。鳥さえ声を立てなかつた。やがてユージンが身じろぎをする音がして、隣<sup>となり</sup>に腰を下ろし、両手で膝<sup>ひざ</sup>を抱<sup>だ</sup>くのが見えた。

<sup>8</sup> 「だからおまえは、『愛すべきやつ』なのよ」

もう何を言われても、僕に怒<sup>おこ</sup>る権利はないように思われた。

(梨木香歩「僕は、そして僕たちはどう生きるか」)

<sup>⑧</sup> 苦心惨憺<sup>くしんさんたん</sup>…難しいことを解決しようとあれこれ思いなやみ、非常に苦勞すること。

関をつくる…ここでは、オンドリが夜明けを知らせるように大きく鳴くこと。

斬新<sup>せんしん</sup>…発想が独自で、これまでに同じようなものがないこと。

ブラキ氏<sup>⑤</sup>…「僕」が飼っている犬の名前。本名ブラキッシュが縮まってブラキシとなり、ブラキ氏と呼ばれるようになった。

躊躇<sup>ちゆうじゆ</sup>…決心がつかなくなつたりして、ためらうこと。

問一 〳〵線部A「人後に落ちるものではない」、B「校長は二つ返事でオーケーした」、C「血の気が引く」とあるが、それぞれ本文中ではどういう意味か。次の中からそれぞれ適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

- A ア 自分の方がより勝っている
- イ 他の人に負けはしない
- エ 自分には当てはまらない
- ウ 他の人にはかなわない

- B ア 校長はいろいろと迷った末に承知した
- イ 校長は気安く、すぐに引き受けた
- エ 校長はどちらとも取れることばで応じた
- ウ 校長は予想していたように許可した

- C ア 強い怒りで、頭に血がのぼる
- イ あわてて、気持ちが混乱する
- エ 不安のあまり、気分が悪くなる
- ウ 心の平静を失って、青ざめる

問二 〳〵線部1「とりあえずカッコに括って横に置いていた」とあるが、これはどういうことか。その説明として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A ユージンのニワトリを授業のためとはいえ殺してしまったことは、自分にとって後味の悪いできごとだから、まともに向き合わないようにしていたということ。

- イ 杉原先生の授業のために、みんなでニワトリを殺してしまったことはとてもむごいことであり、いやな思い出なので記憶から完全に消し去っていたということ。

- ウ ニワトリのことで杉原先生をにくんでいるユージンとの友情から、とてもさわやかなイメージの杉原先生を信らいしようにする自分自身の思いをかくしていたこと。

- エ 自分はどのようなことがあってもすぐに対応できる性格なので、どんなにつらく、ひどいできごとがあっても忘れることができるということ。

問三 〳〵線部2「ユージンには絶対無理だ」と素直に思えた」とあるが、コペルはなぜユージンには「無理だ」と思ったのか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A ユージンは自分の気持ちをごまかせない不器用で、せん細な人間だと思えたから。

- イ ユージンはひかえめで他との争いをさげようとする、気の弱い人間だと思えたから。

- ウ ユージンはよくよと物事を考え込んでしまう、おく病な人間だと思えたから。

- エ ユージンは他人の気持ちを思いやったりすることが苦手な人間だと思えたから。

問四 〳〵線部3「考えればその言い方が、すでに少しずれていた」とあるが、なぜ「ずれて」と感じたのか。その理由として適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

- A 杉原先生は若く行動的で、生徒のためにいろいろなことを企画してくれる先生であったのに、やっとの思いで連れてきたコッコに対する反応はとても素っ気ない感じであったから。

- イ コッコを学校の他の動物と一緒に飼育してほしいということは、母親からあらかじめ連絡してたのんでおいたはずなのに杉原先生はそのことを知らないような言い方で答えたから。

- ウ コッコを学校に連れていけば他の動物たちの仲間として飼ってもらえると思っていたが、杉原先生の言い方はコッコを学校の所有物としてあつかうような感じであったから。

- エ コッコを学校に連れて行って他の動物と一緒に自分で世話をするつもりでいたのに、杉原先生のことばは、自分には世話をさせてくれないような口ぶりであったから。

問五 〳〵線部4「僕は、〳〵期待されていた」とあるが、「僕」が「ニワトリを教材として提出す」ることで、同級生たちが「期待」したことはどんなことか。本文中の言葉を用いて、四十字以上、五十字以内で答えなさい。

問六 —— 線部5「杉原先生の言い分は、いかにも理にかなっているような気がした。『強引きで進んでいく気がした』とあるが、次の①・②の問いに答えなさい。

① 杉原先生の言い分の中のどのような点が「いかにも理にかなっている」と感じたのか。五十字以上、六十字以内で答えなさい。

② 杉原先生のどのような点に「強引き」を感じたのか。五十字以上、六十字以内で答えなさい。

問七 —— 線部6「ちよつと考えれば分かること」とあるが、それはどのようなことか。適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ユージンがとても冷静に作業に加わっていたように見えたので、ユーザー自身が納得した上でコッコちゃんをみんなに提供したのだと思っていたが、それは本当はすごくなやみぬいた末での決断であったこと。

イ ユージンはあのととき黙っていたが、目の前でみんなが楽しそうに、自分がかわいがって飼ってきたコッコちゃんを殺して解体するなんてことはあつてはいけなさと、心の中では本当につらい気持ちでいたこと。

ウ ユージンはコッコちゃんが教材として解体されることを受け入れたので、ペットとしてかわいがってきたコッコちゃんでも、そのようなむごい扱いをされるのはしかたがなかったということ。

エ ユージンが大切に飼ってきたコッコちゃんが殺され解体されることのつらさは、ヒヨコになる前の卵のころから知っていた「僕」自身のつらさと同じくらいであったということ。

問八 —— 線部7「とんでもないことに気づいたんだ」とあるが、「僕」はどのようなことに気づいたというのか。適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 自分があのとときユーザーの気持ちを知っていた以上、ユーザーに声をかけるべきであったが、そうしなかったのでコッコちゃんを死なせてしまったのだということ。

イ 少し考えれば分かるはずなのに、あのとときのユーザーの気持ちに気づかなかった自分はおろかであり、もっと早くユーザーにあやまらなければならなかったということ。

ウ 自分があのとときのユーザーの気持ちに気づいていなかったと思ったが、実は気づいていたのに自分をごまかして、深く考えないようにしていたのだということ。

エ 「軍隊でもうまく生き抜いていける」と言われて腹が立ったが、あのとときのユーザーの気持ちに気づけなかった鈍い自分は、そう言われてもしかたのない人間であったということ。

問九 —— 線部8「だからおまえは、『愛すべきやつ』なのさ」とあるが、ユーザーは「僕」のどんなところを「愛すべき」といったのか。適当なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア コッコちゃんを失うユーザーのつらさを、あの時はまったく感じなかったのに、今になってようやく気づいた自分のおろかさを素直に反省するところ。

イ コッコちゃんを殺さねばならなかったユーザーのつらさがよく分かるなどと、うわべだけのなぐさめを平気で口にして同情するにくめないところ。

ウ コッコちゃんを失うことになったユーザーの本当の悲しみは誰にも理解できないはずなのに、その気持ちを分かちあい一緒に苦しんでいてくれるところ。

エ コッコちゃんを失うユーザーのつらさを理解していながら、大事なことだからしかたがないと自分を納得させるずるさを、素直に認めてなやみ苦しんでいるところ。

問十 —— 線部①～⑤のカタカナを漢字に直しなさい。

二、次の文章を読み、後の問いに答えなさい。

僕が出会ったおもしろい外国人の話をします。

彼はカナダ人で、僕が東京でやっているワークショップに遊びにきました。年齢は20代半ばくらいで、カポエイラというブラジルの闘技をやっているせいか、からだを鍛え上げているだけでなく、からだの使いこなし方もよく知っていました。日本人のマッチョだと「おれ、すごいでしょ」というアピール、つまり自分を「出す」ことだけで終わってしまう人が多いのだけど、彼がおもしろいのは「引く」ことも知っていたこと。しかも、自分自身の存在を控えめにする「引く」だけではなく、相手の力を「引き出す」能力も持っていたのです。

僕はその時みんな「ハイタッチで出会う」という動きをやりました。基本的な動きのコツは第2章でやった「原始人の出会いごっこ」と変わリません。この場では、実際に手をタッチするバージョン。アイコンタクト、ボディインタクトで意思疎通をはかり、タイミングを合わせてばーんと両手で叩き合う。

ハイタッチの理想形のひとつは、できるだけ高い位置で、ばちーんと爽快な音を響かすこと。これは最高に気持ちがいい状態ですね。相手と手を合わせる位置が高いほど、自然と気分が高揚してきます。

僕が先生として見ていると、日本人同士でやる場合、ハイタッチレベルは、マックスを100としたら70くらいでおさまることが多い。おそらく、相手に侵入する度合いをみんなちゃんと測っているのでしょう。「さあ、一緒にハイタッチしましょう!」と、100%やる気全開で相手に向かうと侵入しすぎるような気分になるし、逆に向かつてこられても困るという気持ちもある。また、タッチをする位置も高いところまでは持っていけない。「まあ、このあたりだろう」と、おさまるところがいい位置を互いに探り合いながら、手を合わせているようにも見てとれます。和を重んじる日本人は、中庸が好きなのでしょうか。

ハイタッチは、からだや心の動きが互いに影響を与え合います。僕のワークショップに来たカナダ人は、そのことも知っていたのでしよう。フレキシブルに自分の存在を「出し」「引き」することによって、みんなのハイタッチ能力を引き出していました。

彼が相手よりも少し高いところに手を出すと、相手もその高さまで手が上がる。手を出す時に朗らかに声を上げると、相手もつられて声が出る。それを繰り返していくうちに、どんどん手を合わせる位置は高くなって、いつの間にかジャンプにまで発展。ハイタッチレベルで言うと、70だったものが瞬く間に90へと上がり、さらにもっと楽しくなる方法はないかという状態になったのです。

2 ハイタッチレベルが、こんなにも上がった理由は、カナダ人の彼が「調子に乗ること」を知っていたからかもしれません。そして、相手のことも「調子に乗せて」いた。

でも、ただ自分の「出し」「引き」を調節しているだけでは、相手のハイタッチレベルをそれほど簡単には上げられません。僕が見たところによると、彼は自分のからだに対して、ポジティブな思いを抱いていました。いいも悪いも自分のからだはこれだからというたしかない思いが彼にはあった。そのポジティブな思いは、相手にも伝わるのでしょうか。迷いのない力に乗せられたからこそ、知らず知らずのうちに、ハイタッチの位置は高くなり、気分も上がるというような、力が引き出されていったのです。

さらに、彼は「相手がいるからこそ、自分の力が出せる」ということも知っていたのだと思います。相手がいないとハイタッチはできません。相手がいるからこそ、お互いの動きや声を感じ取り、響かせ合い、影響し合いながら、その力は飛躍的に伸びていきます。お互いの間を跳ね返るように飛び交い、相乗効果が生まれてさらに増大していく。このような効果は、何もハイタッチにかぎった話ではありません。相手がいるすべての動きに当てはまります。もちろん、ふたりにかぎらず、何人でも同じ。「一緒に歌をうたう」「キャッチボールをする」「一緒にジョギングをする」「一緒に食べられている料理のおいしさを噛みしめ合う」なども、自分のからだだけで受け止めたことを相手に返すという動きもそう。「ケンカ」だつてそう。相手をののしる言葉はどんどんエスカレートして、たとえ本心ではなくても、酷い言葉を思わず言ってしまうこともある。

こうしたからだの動きは、お互いの影響なしには成り立たない。良くも悪くも高度なコミュニケーションを、僕たちは知らず知らずのうちにやっているのです。

たとえば、友達でも家族でも誰かとふたりにて会話をしている時のことを思い出してください。相手がしゃべっていることに対

して「うん」と答えてうなずいたり、「そうそう」と相づちを打って自分の考えていることを話し始めるといのは、実はものすごく難しいこと。なぜなら、相手が話している時は自分は話さないし、相手の話したいことはだいたいこのあたりで終わっただろうなという呼吸をつかんで、じゃあ次は自分の気持ちを話す順番だというやりとりを自然にしています。会話のなかで、「このタイミングで、次は僕がしゃべっていいですか？」ということはいちいち訊かなくても、だいたいの頃合いをつかむことができます。しかも、お坊さんのお説教的に言うならば、「相手と話している時は、言葉だけじゃなく心の声も一緒に聞いて、相手が何を感じているのかを考えましょう」というやりとりだって、普段からやっている。そのくらい、言葉を使ったコミュニケーションに関しては、巧みなやりとりを交わしているのです。

僕は会話でなら意識せずにやっているこうしたコミュニケーションを、からだでやっていきたいと思っています。ワークショップでいろいろな動きをやっているのも、その感覚をつかんでほしいから。たとえば互いに両方の手のひらを体の前で合わせた時、相手は押したいと思っているのか、引きたいと思っているのか、だとしたら自分は押すのがいいか、引くのがいいのかをわかるようになってほしい。同時に押し合っていたら、「からだでの会話」は成立しないのだから。

世の中には、ひとりではできない動きというものがたくさんあります。人によりかかるといふ動きは相手がいなくて絶対に成り立たないし、ハイタッチする、コンビニでお釣りの受け渡しをする、みんなで木を揺らしてリングを落とすという動きだって、ひとりではできません。

こうした動きは、いくら自分が「良くしよう」と思ってがんばってみたところで、上手くいかないことがある。相手だって「良くしよう」とやっているはずなのに、なぜか上手くいかない。お互いの動きは「良い」のに上手くいかないのは、自分のことばかりで相手のことを考えてないという場合が多いからだと思うのです。

(近藤良平「からだと心の対話術」)

⑧ ワークショップ：参加者が実際に体験しながら学びあったり、みんなで何かを作り出したりする会。

マッチョ：たくましさを筋肉美をほこるさま。また、そのような人。      アピール：自分のみ力を周りの人々にうったえかけること。

第2章でやった「原始人の出会いごっこ」：原始人になったつもりで自由に歩き回り、目が合った人に手をあげて「ヤァ」とあいさつ

をし、相手も同様にあいさつを返す遊び。

バージョン：形式を改め、作り直したもの。      アイコンタクト：視線を合わせて、意思を伝え合うこと。

ボディコンタクト：からだをふれ合わせる事。      中庸：どちらにもかたよらず、正しいこと。

フレキシブル：その状況に応じて、適切に判断し行動すること。      ポジティブ：積極的に物事をそれでよいと認めるさま。

問一 ——線部1「自分の存在を『出し』『引き』することによって、みんなのハイタッチ能力を引き出していました」と

あるが、これはカナダ人の彼がどのようなことを指しているのか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 相手に入りこむ度合いを見きわめ、おだやかな笑顔を浮かべたり、無理なく手が出せる高さに手を置いたりすることによって、相手も楽な気持ちで笑顔を返したり、ほどよい高さで手を合わせたりできるようにしていったこと。

イ 相手に自分のやる気や熱意を全力で伝え、初めから大きな声を出したりできるだけ高く手を伸ばしたりすることによって、相手もすぐに高い位置に手が出せたり、楽しみながらハイタッチができるようになっていったこと。

ウ 相手の様子を見ながら、楽しいふんいきを伝えたり、手を合わせる位置を最初から高くするのではなく次第に上げていったりすることによって、相手も自然と声が出せたり、高いところまで手を出せるようになっていったこと。

エ 楽しげで大きな声を出したり、より高い位置に手を置くというお手本を相手に示し、相手もそのやり方をその通りにまねすることによって、同じように声が出せたり、高い位置にまで手が出せるようになっていったこと。

問二——線部2「ハイタッチレベルが、こんなにも上がった理由は、カナダ人の彼が『調子に乗ること』を知っていたからかもしれません。そして、相手のことも『調子に乗せて』いた」とあるが、これはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア カナダ人の彼は「ハイタッチ」を日ごろやりなれていたもので、どうやれば高い位置で「ハイタッチ」ができるか知っており、自分の相手にやってみせることで、だんだん高い位置でできるようになったということ。

イ カナダ人の彼の自分のからだに対するたしかな思いが、「ハイタッチ」を迷いなく行うことで相手にも伝わり、互いに影響しあい、気分を高め合いながら、より高い「ハイタッチレベル」になっていったということ。

ウ カナダ人の彼は「ハイタッチ」をより高い位置でやった方が、気分が高まることを知っていたので、相手の手の位置よりも常に少し高い位置で「ハイタッチ」を繰り返し、自然と気分を高めていったということ。

エ カナダ人の彼の経験上、「ハイタッチ」は、気分が高まったときにしかできないことを分かっていたので、相手の気分を高めてから始め、最後には高い「ハイタッチレベル」にしたということ。

問三——線部3「たとえ本心ではなくても、酷い言葉を思わず言ってしまうこともある」とあるが、なぜ「酷い言葉を思わず言ってしまう」のか。その理由を四十字以上、五十字以内で答えなさい。

問四——線部4「相手が話している時は、言葉だけじゃなくて心の声も一緒に聞いて、相手が何を感じているのかを考えよう」とあるが、心の声を聞くとはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 相手と気持ちを通じ合うのは難しいので、気持ちを表した言葉だけは聞きもらさないようにすること。

イ 相手が使っている言葉の意味を正しく知り、言葉から読み取れる相手の気持ちや考えを理解すること。

ウ 相手の気持ちは言葉だけではわからないので、普段の発言やくせから相手の気持ちを推理すること。

エ 相手の表情や態度などにも目を向けて、言葉の裏側にある思いや気持ちもあわせて受け止めること。

問五——線部5「からだでの会話」とあるが、それはどういうことか。次の中から適当なものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 互いが同時に動くのではなく、今はどちらが動く順番であるのかを相手のからだの動きから読み取って、ちょうどよいころ合いを見計らって動き合うこと。

イ 相手のからだの動きから、相手がどうしたいのかを必ず考え、自分がどのように動くのかを決めて、からだを動かすということを繰り返していくこと。

ウ 互いのからだの動きを感じ合うことで、それぞれが相手の動きに応じたり、息を合わせたりして、影響し合いながらからだの動きのやりとりをすること。

エ、ひとりではできない動きがあることを分かった上で、自分がこうしたいと思う動きを相手に伝える努力をし合いながら、からだの動きの共同作業をすること。



